

ーに関する名著もある。

K. Semm 教授(西独)はラパロスコピー直視下卵管凝固不妊術の開拓者であり、医療工学に詳しく、最近では直視下卵巣のう腫摘除術などを精力的に行っている。その方面のコメントがなされるはずである。

Dr. H. Frangenheim (西独)はラパロスコピー、ヒステロスコピーに関する著書を出しているが、今回は骨盤痛 (pelvic pains) に対するラパロスコピー下手術の紹介がある。

Dr. J. M. Phillips (米)は Am. Assoc. of Gynecologic Laparoscopists を主宰し、エンドスコピーに関する多数の著書を刊行している。

ラパロスコピーによる不妊手術として、電気凝固、クリップ法、Yoon 法などの術式、治療成績の多数例についての報告が期待される。

さらにこれら手術例の卵管再建術が、マイクロサージェリーの応用で発表される予定である。

Dr. A. Audebert (仏)はラパロスコピー、ヒステロスコピーの第1人者であり、不妊治療に対するエンドスコピーの利用が報告されよう。

柴田直秀君(日本)は故林基之教授の第1の後継者として、クルドスコピーをはじめ各エンドスコピーに情熱を燃やしてきた。これまでクルドスコピー直視下に卵巣、卵管に対する手術を推進してきた。今回の報告では、一般の腔式手術における視野の不足をエンドスコピーで補いながら進めていこうとの試みが発表される。さらに体位の異なる腔式手術とクルドスコピーの両者に適用できる手術台の開発や、手術練習用ファントム (training box) の試作についても公表される予定である。

エンドスコピーの発展は止まるところを知らない。われわれの想像もしなかつた新しい手術方法が、次々と出現してくる。今回のセミナーで、現在の世界における趨勢の一端を知り、さらには将来への展望を窺うことができるであろう。(杉本 修)

S-27: Recent Advances in Obstetrics

このセミナーは No. 30 の「性病における最近の傾向」および No. 27 の「男性化症」の夫々がセミナー構成が不可能になつたために、FIGO 会長である R. Caldeyro-Barcia の申出により急遽編成されたものである。

産科領域における最近のめざましい進歩は妊娠中における胎児胎盤系の機能検査法の開発、普及と分娩中にお

ける胎児の連続監視機構の確立にある。当然これらのテーマは他のセミナー、展示、フィルムなどのセッションに数多く盛り込まれているが、一つのセミナーの中で討論することに大きな意義がある。

とくに提案者である R. Caldeyro-Barcia は、セミナー No. 6「分娩時母体々位の影響」との関連において次のように述べている。即ち、自然陣痛の場合には有効収縮時間は、誘発や増強といった人工陣痛に比して著しく短時間であり、しかも有効である。これに加えて分娩第2期に坐位分娩を行えば、もつとも生理的な体位であるところから、児に対する障害はもつとも少く、彼らが測定した限りでは、分娩経過中の胎児血 pO_2 と pH の値は世界中のどの報告よりも高値で、極めて理想的であると強調している。

次に E.V. Cosmi (イタリア)は「アミノフィリンによる早産の治療」と題して、in vitro および in vivo の動物実験成績をもとに、人では24~34週の切迫早産例で頸管開大が4cm 以内の者に、アミノフィリンの点滴静注を試み、子宮収縮の強度と頻度を著明に減少させ、分娩を72時間以上遅らせることに成功したと述べている。

第2の演者は自治医大の佐藤郁夫助教授で、「分娩中の子宮血流量と胎児の経皮的 pO_2 の連続記録」により、分娩の初期には子宮収縮によつて胎児 pO_2 は増加するが、分娩が終りに近づくと子宮筋層中の動脈血流量は初期の50%以下に減少し、それに伴つて胎児 pO_2 も減少し、胎児心拍数パターンと密接な関連があることを示している。

第3は上述の R. Caldeyro-Barcia で、とくに「分娩中の自然ならびに指示によつて意識的にかけられた怒責が胎児心拍数、 pO_2 、pH、 pCO_2 に及ぼす効果」について報告する。

5番目の A.M. Flynn (英国)は最近普及しつつあるロッシュの器械を用いて、「分娩中のヒト胎児経皮的 pH 電極の連続装着の価値」について報告する。

以上の報告は卑近な分娩監視に種々のモニターを利用した報告であるが、これらからえられた知識は日常臨床に資するところ大である筈である。

第4は R. Stark (米国)で、「RDS の予知法としての羊水蛍光吸光度値」を報告する。抄録未着のため詳細は不明だが、肺成熟度検査に L/S 比が用いられるのは周知の通りであるが、レシチン測定が煩雑なため臨床的にはいわゆる振盪試験(泡沫テスト)が行われている。最近分光光度計を用いた吸光度測定による方法の報告を

散見するが、本演者は蛍光々度計による羊水分分析の成績を発表するものと考えられる。未処理の羊水を直ちに測定できるのなら、臨床応用価値は高い。

本セミナーにはさらに追加発言として G, Rooth ら (スウェーデン) が「胎児圧出法と母体ならびに胎児の低酸素状態との関係」について報告する予定である。

(岩崎寛和)

S-28: Intersexuality

Scott 教授は先天性副腎性器症候群に対する Bromocriptin 療法について述べられる。本症にはステロイド生合成酵素の先天的欠損のため、コルチゾール産生障害、下垂体へのネガティブフィードバック障害、ACTH 過剰産生を通じて副腎過形成がまねかされているものが含まれている。最も一般的なものはステロイド—21—水酸化酵素の欠損で女性の男性化の原因になっている。このような症例でコーチゾン療法に反応し妊娠する例もあるが、定期的排卵の得られない例も多い。

Scott 教授はプロモクリプチンがクッシング氏症候群やネルソン症候群で ACTH の異常分泌を制御し高プロラクチン血症婦人の排卵を出現させることに着目し、副腎性器症候群の3例にプロモクリプチンを投与した。3例とも投与前にはエストロゲン刺激にゴナドトロピンが反応しなかつたが、同様の例で排卵のあるものは正常のポジティブフィードバックがみられた。治療1カ月以内に3例中2例に排卵周期がみられるようになり、他の1例は6カ月でエストロゲンのポジティブフィードバックがみられ、15カ月で排卵周期がはじまった。これらの知見とともに本症に対する種々の見解を述べられる。

次に Niekerk 教授はその講演内容の詳細は不明であるが、真性半陰陽について話される。真性半陰陽では卵巢、睾丸、卵巢睾丸の三者が異常な組合せで存在している。染色体は約半数が 46, XX であり、他は 46, XY の他、46XX/46XY, 46XO/46XY その他モザイクがみられる。現在その成因について種々論議されているが、中でも Y 染色体連関の組織適合性抗原 (Y-linked histocompatibility antigen) と関連した説に興味をもたれている。すなわち胎児はもともと女性になるよう方向づけられているが、HY-抗原があれば精巣が出来るという考えがある。そしてショウジョウバエなどで常染色体上に Y 染色体上の性調節センターと同様の遺伝子が存在することが知られているので、ヒトの場合も同様のことがあるとすると 46XX で睾丸の発生も一応説明出来る。またこの常染色体上の調節因子の機能が不完全なもので

あるという理由で睾丸と卵巢の同時発生も考えられている。Niekerk 教授の講演でもこの HY-抗原について詳細にふれられるのではないと思われる。

次に Rodriguez-Armas 教授の話される intersex の手術療法は肥大陰核切除のような単純なものから人工造陰術さらには性転換手術とよばれるものまで種々あるが、これは手術方法そのものの以外にも心理的側面、社会的側面など種々の面から問題を含んでいる。これらの面についても明解な話が聞かれるものと期待される (岡田弘二)

S-29: Genetics in Reproduction

この Session においては4名の演者によつて、① 臨床遺伝学、② 細胞遺伝学、③ 免疫学の立場からと④ 性細胞の減数分裂の問題を中心として夫々遺伝と Reproduction についての研究発表や提言が行われる予定である。

先づ、joint chairman の Dr. Kjessler (Sweden, Linköping 大学産婦人科教授) は細胞遺伝学の大家であり、特に男性不妊症の染色体研究では世界的にも注目されている。もう一人の Dr. Salvatore (Brasil, Sao Paulo 大学産婦人科教授) は臨床遺伝学の他に子宮内膜癌の組織発生に関する著書などを発表しておられる。

この Session の運営については Dr. Kjessler の強い要望もあり、Harvard 大学の Milunsky 教授に特別に30分の講演時間をもうけて臨床遺伝学について全般的な解説講演をお願いしてあり、その後で3名の方が15分ずつ発表されるため、討論時間が15分しかないが、特に内容のある各演者の講演発表に期待して頂きたいと思う。

1) Dr. Milunsky は日本でもその著書で知られている方であるが、先天奇形や知能発育障害児や遺伝性疾患が全分娩例の3~4%にみられ、小児専門病院では入院患者の25~30%がこれらの患者で占められている事実から、産科医は臨床遺伝学について、正しい診断と対策を行うため深い知識が必要であることを具体的例を示して解説される。即ち、遺伝性疾患の複雑性、表現模写と表現型の関係、生化学的遺伝疾患の出生前診断の必要性、遺伝疾患の母児に対する影響などについて綜説的に述べて頂く予定である。

2) Dr. Rainer (Yugoslavia, Ljubljana 大学、産婦人科教授) は、細胞遺伝学の立場から家族計画における染色体異常の問題をとりあげ、次の世代に遺伝する事例について、不均衡型転座異常例や、自然流産例におけるロバートソン型の転座例、均衡型転座例における奇形や流産、死産、部分モノソミー、部分トリソミーなど、いく